



ブルーベリーのタネ無しと房取り収穫の不思議な関係

ブルーベリーは房の中の果実がばらばらに熟すので（図1）、一粒ずつ摘み取る必要があります収穫に労力を要します。そこで、省力的に収穫ができ、都内で栽培しやすく食味も良好な品種の開発に取り組み、2023年に新品種「TB-02」を育成しました（図2）。「TB-02」は、房の中の果実の成熟が比較的揃うので、ぶどうのように房取り収穫ができます（図3）。ブルーベリーで房取り収穫に向く品種の開発は国内外で初の事例です。なぜ、「TB-02」では房取り収穫ができるのでしょうか？

ブルーベリーは通常、同じ房の中でも、タネが多く入っている果実ほど早く熟す性質があるため、成熟のばらつきが大きくなります。さらに、完熟した果実は落下しやすい性質もあるので、房取り収穫には向きません。一方、「TB-02」はブルーベリーでは珍しく、『単為結果性が強い』という性質をもっています。単為結果性とは、受粉しなくても実が着き、タネ無しの果実になるという性質です。「TB-02」の果実はタネ無しであるため成熟のばらつきが少なく、また落果しにくい性質もあるので、房取り収穫に適すると考えられます。また、単為結果性が強いとミツバチなどの訪花昆虫が来なくても安定的に実が着き、タネ無しのため食べやすく、ジャムなどへの加工もしやすくなります。

農総研では現在、都内生産者への普及にむけて「TB-02」の苗木の準備を進めています。

（園芸技術科・バイテクチーム）



図1 一般的な品種の果実（成熟が不揃い）



図2 「TB-02」の果実（成熟が揃い均一に色づいている）



図3 省力的な房取り収穫の様子

ビンカの有望品種を紹介します

ビンカは高温や乾燥に強い一年草で、毎日のように新しい花を咲かせることから別名ニチニチソウとも呼ばれます。夏の花壇に人気の品目で、赤・白・桃色など多様な品種があります。令和6年6月24日、より一層の種苗改善を目的として、第66回東京都種苗改善審査会「ビンカの部」が開催されました(図1)。全17品種が出品され、審査の結果、I等に「F₁ タイタン アイシーピンク」(ミヨシ)(図2)、II等に「F₁ タイタン ポルカドット」(ミヨシ)、III等に「パシフィカXP アプリコット」(タキイ種苗)等が選ばれました。入賞した品種は近年人気の爽やかな花色で、分枝性に優れ、苗の揃いが良い点が特に評価されました。

(園芸技術科・花きチーム)



図1 審査の様子



図2 I等 F₁ タイタン
アイシーピンク (ミヨシ)

ダイコン・キャベツ・ハクサイの2～3月出荷をめざして

重量野菜3品目の2～3月出荷をめざして、低温等による障害の少なく収量性のある品種を選定し、被覆資材などを利用した栽培法を明らかにしました。

ダイコン: 播種は10月下旬で、長形ダイコン「YR春の浦」に透明マルチの9227(株間27cm)を、短形ダイコン「味短歌」に透明マルチの9220(株間20cm)を用い、外張に「ユーラックカンキ2号」を、内張に「寒冷紗」の二重トンネル栽培を行うことで、抽根部の障害発生を軽減できました。キャベツ: 有望品種は「ひなの」で、8月中旬播種の9月中旬定植で2～3月収穫が可能です。結球が確認できた時点から「寒冷紗」を地表から50cm程度の位置になるように浮き掛けを行うことで、障害の抑制につながりました。ハクサイ: 有望品種は「おもむき」で、9月上旬播種の10月上旬定植で2～3月収穫が可能です。キャベツと同様、浮き掛け被覆栽培で障害や内部腐敗を低く抑えられました。

(園芸技術科・野菜チーム)



図1 2重トンネル栽培



図2 寒冷紗による浮き掛けの様子

ヤシガラ使用開始時の診断フローチャートを作成しました。

近年、都内ではヤシガラを培地に用いた養液栽培によるトマト生産が増加しています。しかし、市販のヤシガラには、「あく」と呼ばれる水溶性成分含量の高いものがあり、そのまま使うと生育障害を起こす場合があります(図1)。そこで、栽培に適したヤシガラであるか、使用開始時に診断できるフローチャートを作成しました(図2)。

初めにまずEC(電気伝導度)を測定し、あく抜き処理の必要性を判断します。その後、カリウム(K)とカルシウム(Ca)・マグネシウム(Mg)のバランス(塩基バランス)、pHの順で確認、調整を行うことで、生育に適した環境を整えます。このフローチャートを活用することにより、生育障害を未然に防ぐことができ、ヤシガラ培地での安定生産が期待できます。

(生産環境科・土壌肥料チーム)



図1 あくによるトマトの生育障害

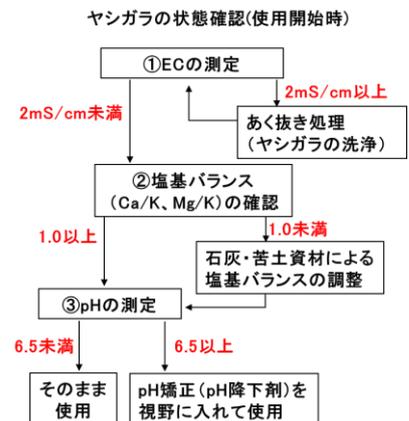


図2 診断フローチャート

新作型・新品種野菜の残留農薬調査

近年、ミニ野菜、ベビー野菜といった普通よりサイズの小さい品種の生産・流通が増加しています。これらの野菜は、生産者には「軽くて扱いやすい」、消費者には「新鮮なうちに使い切れる」など、双方にとって利点があるため、人気が高まっています。

ミニ野菜はミニトマトのように、通常の品種と農薬の残留基準値が異なるものもありますが、ほとんどが通常の大きさの品種と同じ農薬を使うことができます。しかし、栽培期間が異なることや重さが軽いことから、使用した農薬の残留挙動が変化し、基準値を超過することが懸念されます。そのため農総研では、これらのミニ野菜を実際に栽培し、使用した農薬の残留量を調査することで、その安全性を確認する試験を行っています。

令和6年度は、ミニハクサイにジノテフラン水溶剤とシアゾファミド水和剤を使用し、その残留状況を調査しました。その結果、基準値を超過することはなく、通常の大きさの品種と同じ使用方法でも安全性に問題がないことが確認できました。

(生産環境科・農薬・安全性研究チーム)



図1 ミニハクサイ試料例

(長さ: 31.2 cm 重さ: 766.3 g)

街路樹におすすめする低木を紹介します

街路樹には多くの低木が植栽されていますが、関東では劣悪な環境に強く枝の伸びが比較的緩やかなツツジ類が低木全体の半分以上を占めています。今後、植栽する低木の種類を増やすことで街並みの彩りが増し、より魅力的なものにできると考えられます。そこで、街路樹に適していると考えられる12種類の低木について、成長速度や観賞性などの特性を調査しました。その結果、成長が緩やかで目立った病虫害被害が見られないオタフクナンテン（図1）と、花と葉の観賞性が特に優れ、病虫害被害が少ないヒメシャリンバイ（図2）を街路樹としておすすめできる低木と評価しました。これらの低木を利用場面に応じて選択することで、道路の管理コスト低減、景観的価値の向上につながることを期待されます。（緑化森林科・植木チーム）



図1 オタフクナンテン



図2 ヒメシャリンバイ

夜間照明によりアサガオの開花が妨げられます

都市部では、街路灯や店舗照明の影響で夜でも明るいため、アサガオが開花しにくくなる光害（ひかりがい）が問題となることがあります。そこで都内の「あさがおまつり」で良く利用されている大輪咲品種において、どのくらいの照度で光害が発生するかを調査しました。その結果、いずれの品種も夜間の光照射で開花が妨げられること、ただし、開花に影響を及ぼす照度には品種間差があることが明らかとなりました。（表1）（江戸川分場）

表1 大輪咲アサガオ品種と開花を妨げる最低照度

大輪咲品種	開花を妨げる最低照度*
「暁の紅」	4.3 ルクス
「富士の紫」	30 ルクス
「平安の紅」	4.8 ルクス

*これより高い照度では顕著な開花の妨げが認められる。
最低照度は、調査数の2割が開花しなくなる照度で判断した。



育てます豊かな食とみどりの東京

公益財団法人 東京都農林水産振興財団 農林総合研究センター

〒190-0013 東京都立川市富士見町3-8-1

TEL: 042-528-5216

<https://www.tokyo-aff.or.jp/site/center/>

X: @tokyo_tdfaff

こちらのQRコード
からご覧ください

